メタモルフォーゼの列島史

青山宏夫
総合研究大学院大学日本歴史研究専攻／国立歴史民俗博物館

中世以前の日本図には、東西に延びた杵状の国土とともに、その四方を取り囲む、世界の果てとしての異域・異界が描かれていた。16、17世紀に始まった日本列島の地図上のメタモルフォーゼは、より正確な地理像と入れ替わりに、あの魅力的な異界が徐々に消滅していく過程でもあった。

東と西の日本列島

花綵列島――両端を大陸に接近させて弓なりに連なる日本列島を、われわれはこう呼ぶことがある。その形状が、花で編んだ綱の垂れ下がるようすに似ているからだ。しかし、往古、日本の姿形は独鈷に喩えられていた。たとえば、中世の百科事典『拾芥抄』には「此土形如独鈷頭（このつちのかたち、とっこのかしらのごとし）」という記述がある。独鈷とは、密教の修法に用いる仏具の1つで、杵のような形をしている。つまり、この比喩を生んだ発想にしたがえば、日本の国土は弧状ではなく、杵のように真っ直ぐに延びる形態をしていたことになる。

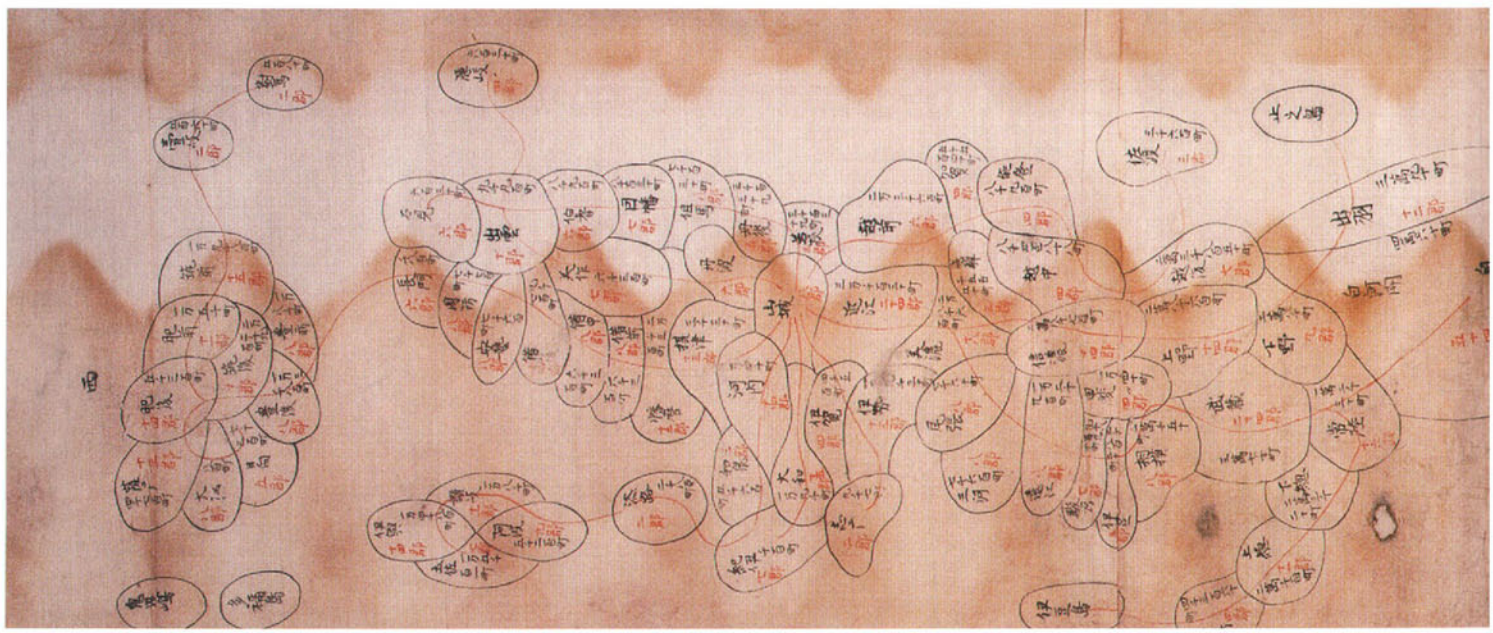
さて、日本の国土の境域を記載する古代から中世の文献資料をみると、国土が東西の2点で表示されることが圧倒的に多いことに気づく。たとえば、鎌倉時代中期の『承久記（慈光寺本）』巻上は、源頼朝の事績にふれて、

> 西ニハ九国二島、東ニハアクロ・ツガル・夷ガ島マデ打靡シテ、威勢一天下ニ蒙ラシメ、栄耀四海ノ内ニ施シ玉フ

と記す。西は九州・壱岐・対馬から東は津軽・蝦夷が島まで天下を平定したというのであるから、東西の果て2点によって国土の全域が表現されていたことになる。また、室町時代には「東は小馬の足、西はろかいのとどく程」という言い回しがあったが、これも全国を表現したものだ。

さらに、近世初期以前に作られた日本図、いわゆる行基図には、しばしば国土の大きさに関する注記があるが、これも東西の2点によって表現されていた。たとえば、16世紀中期と推定される『南瞻部洲大日本国正統図』（唐招提寺蔵）には、

> 自王城到□（陸）奥東濱三千□（五）百八十七里矣
> □（又）到長門西濱一千九百七十八里



とある。これ以外の行基図における注記も大同小異で、要するに、国土の大きさを中心である都から東の果てと西の果てまでの距離によって示しているのだ。

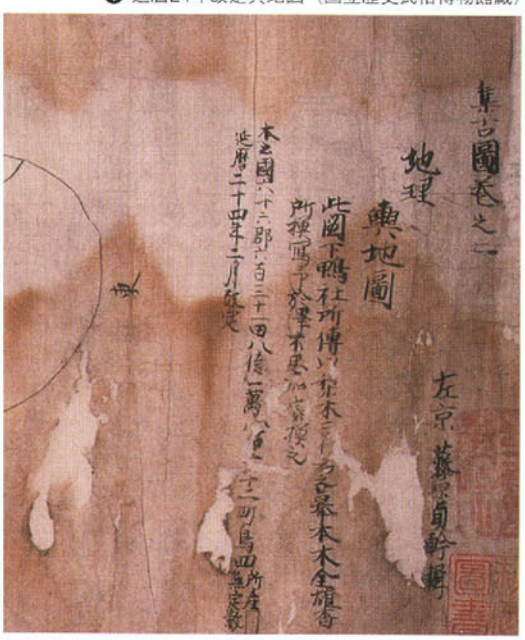
しかも、ここで注目すべきは、こうした東西の2点のみによって表示される場合以外でも、南や北を欠くことはあっても、東と西を欠くことはないということだ。つまり、東と西の果ては、国土の境域を表示する際のもっとも基本的な要素であったのだ。

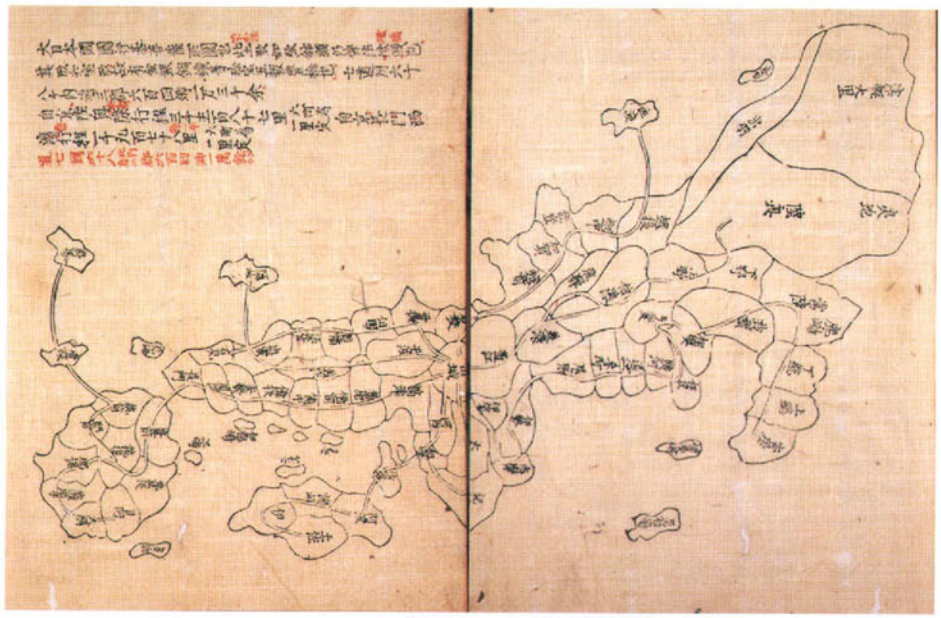
ところで、ここでいう東の果てとは津軽や蝦夷が島などであり、西の果てとは九州や壱岐・対馬・鬼界などの島々のことである。北の果ては佐渡、南の果ては土佐や熊野なのだから、日本列島は随分と東西に長く延びた形態としてイメージされていたことになる。

では、地図は日本列島をどのように描いているだろうか。嘉元3（1305）年に写された現存最古の日本図（仁和寺蔵）や、江戸時代の写本ではあるが延暦24（805）年の改定と伝えられる『輿地図』（❶）をみると、東西にほぼ真っ直ぐに延びる日本列島が描かれていることに気づく。また、後述するように、15世紀以降にもこの形態を描く日本図が散見される。

つまり、こうしたイメージは、単なる修辞ではなく、具体的な形態をもつ地理像としても存在していたのだ。だからこそ、国土の東西の果て2点を見定めることで、国土の広がりの全体を把握できると考えたのであるし、独鈷の比喩も生まれることになったのである。

❶ 延暦24年改定輿地図（国立歴史民俗博物館蔵）





❷ 慶長12年版『拾芥抄』所載日本図（国立歴史民俗博物館蔵）

立ち上がる東北

しかし、こうした地理像にもやがて変化の兆しがあらわれる。その変化とは、今でいう東北地方が北に立ち上がって、日本列島が湾曲する気配をみせることだ。たとえば、前述した16世紀中期の唐招提寺蔵日本図をみると、弱いながらも本州東部が北へ立ち上がっていることに気づく。しかし、まだ旧来の地理像の尾を引いているためか、国土の果てとして本州の先端にあるべき「夷地」の文字が、東に偏った位置に記載されている。

また、『拾芥抄』の天文17（1548）年書写本と天正17（1589）年書写本のそれぞれに掲載されたいずれの日本図にも、本州東部が東に突出して東西に真っ直ぐに延びる日本列島が描かれている。ところが、同じ『拾芥抄』でも、やや時代を下った慶長12（1607）年版に掲載の日本図（❷）になると、本州東部が北へ立ち上がってくるのだ。

ところで、15～16世紀の頃、日本の行基図が朝鮮や中国さらにはヨーロッパにまで伝わり、その写本やそれをもとにした図がつくられることもあった。たとえば、朝鮮については、1402年に作製された世界図『混一疆理歴代国都之図』（龍谷大学蔵）もその1つで、これには同系統のいくつかの異本もある。また、1471年に成立した日本と琉球に関する研究書『海東諸国紀』に掲載された日本図もよく知られている。さらに、中国については、16世紀後半に編纂された日本研究書『日本一鑑』などに行基図が掲載されているし、フィレンツェやマドリードにも16世紀後半と推定される行基図の写しが残っている。

これらはいずれも、当時日本にあったはずの行基図を推定するための貴重な資料であるが、それらに描かれた日本列島に注目すると、東西に真っ直ぐに延びる形態と本州東部が北へ立ち上がった形態との2つのパターンがあることに気づく。つまり、この時代、新旧2つの地理像が併存していたのだ。過渡期的状況ということができるだろう。

さて、こうした変化は、17世紀中頃になるとますます顕著になってくる。すなわち、それ以前は、たとえば『行基菩薩説大日本国図』（❸）のような、いまだ中世的な色彩を残す行基図タイプの図が刊行されていた。しかし、そ

❸ 行基菩薩説大日本国図（国立歴史民俗博物館蔵）

れ以降、行基図タイプの図が主流から後退し、新しいタイプの日本図が刊行され普及するようになるのである。

しかも、これこそが15～16世紀の図と異なる点なのであるが、それらの図においては、北へ立ち上がる姿が現実性をもって立ち現れてくるのだ。たとえば、行基図タイプから脱した最初の刊行図である寛文元（1661）年刊行の日本図（❹）の東北地方をみると、海岸線のほかに国境や地名などの地誌的事項の記載も現実性を帯びていることに気づく。つまり、この時期、地図上の日本列島は名実ともに形態変化――メタモルフォーゼ――を起こすのである。

では、この時期の日本図に何が起こったのであろうか。実は、それには近世国家の成立に関わる大事業が関係していた。開設まもない江戸幕府にとって、国家支配のために国土の実状を把握することは急務であった。そこで、諸国の大名に命じて各国の国絵図を作製させたのである。幕府が開かれた翌年の、慶長9（1604）年のことである。これ以後、全国的な規模での国絵図作製事業は4回行われたが、17世紀に発令されたものにかぎると、寛永10(1633)年、正保元（1644）年、元禄10（1697）年と続く。

さらに、これらの各事業においては、こうして作製された国絵図をもとにそれぞれ日本総図が編纂された。いわゆる江戸幕府撰日本図である。このうち、その存在が確かなのは正保日本図（❺）と元禄日本図であるが、このほかに正保以前と考えられる日本図――従来から慶長日本図といわれてきたものだが、近年は寛永日本図とする意見もある――も残されている。

これらの日本図は、伊能図のような実測図でこそないが、各国の詳細な調査によって作製された国絵図をもとに編纂されたものであるだけに、日本列島の少なくとも概形については、実状をとらえているといってよい。つまり、日本図としては、画期的な形態をもつものであったのだ。

ところで、こうした国家支配のため

に作製された図は、本来、幕府の文庫に保管されているものなのだが、新たな図が作製されたりすると、旧図はしだいに庫外にも写し伝えられるようになってくる。たとえば、正保日本図が完成した17世紀中頃になると、それ以前の幕撰日本図をもとにした手描きの日本図屏風や刊行日本図が現れる。前述の寛文元（1661）年刊の日本図は、そうした刊行日本図の嚆矢と位置づけられるものなのである。

これ以後、このタイプの日本図は刊行が相次ぎ、この形態の日本列島像がしだいに普及していくことになる。こうして、17世紀の中葉、地図における日本列島のメタモルフォーゼが広く進行していったのである。

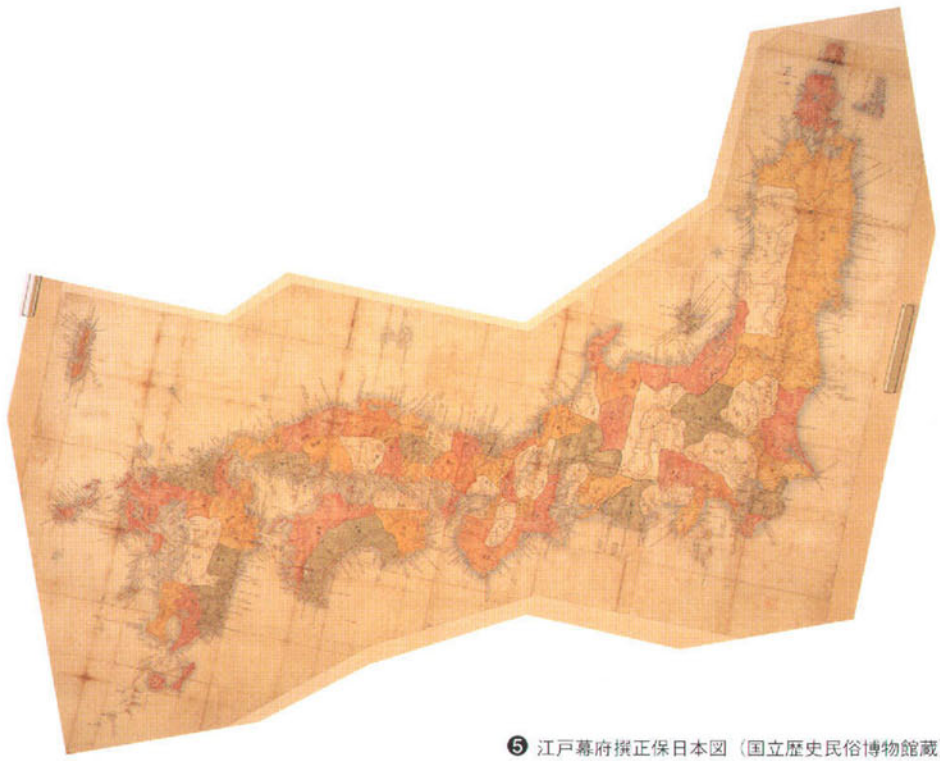
❹ 寛文元年刊日本図（国立歴史民俗博物館蔵）

脱皮する列島と閉じられる海

さて、国土が東西に長く延びていると考えられていた時代、その四方には異域や異界があると想定されてもいた。実際、それらの異域や異界が描き込まれた日本図も少なくない。たとえば、❸をみると、東に「いゝしま（伊々島）」「ゑぞ（蝦夷）」など、西に「かうらい（高麗）」「りうきう（琉球）」、南に「らせつこく（羅刹国）」、北に「かりのみち（雁道）」が描かれている。これらは、国土を囲繞する世界の果てとして、東西に延びる国土としての日本列島と一体となって、1つのコスモロジーを形成していた。

しかし、日本列島にメタモルフォーゼが起こると、その身にまとっていたこれらの外皮にも変化が現れる。もちろん、もっとも大きな影響を受けたのは、東と北の異域や異界であった。

東の異域や異界は、国土の東限としての本州の先端と対峙することで成り立っていた。そのため、本州の先端が北上すると、それに合わせて北へ引っぱり上げる力が加わることになる。しかし、これに反して、それを「東」の位置のままに留め置こうとする力も同時に働いた。というのは、地図表現にはいわば「慣性」のような性質があって、しばしば旧態を長く保持する傾向



❺ 江戸幕府撰正保日本図（国立歴史民俗博物館蔵）

があるからだ。

そのため、東の異域や異界は、2つの相反する力によって南北に引き延ばされることになる。寛文6（1666）年の『扶桑国之図』（❻）をみてみよう。図の右上に「まつまへ」「てしをふろ」と記載された大きな陸地が描かれているが、その南つまり本州東方にも「めなしふろ」「ゑぞのちしま」と記載された陸地があることに気づく。いずれも蝦夷地のことだ。こうした南北に長大な蝦夷地の図像は、2つの力が作用し合っていた17世紀後半の日本図によくみることができるのである。

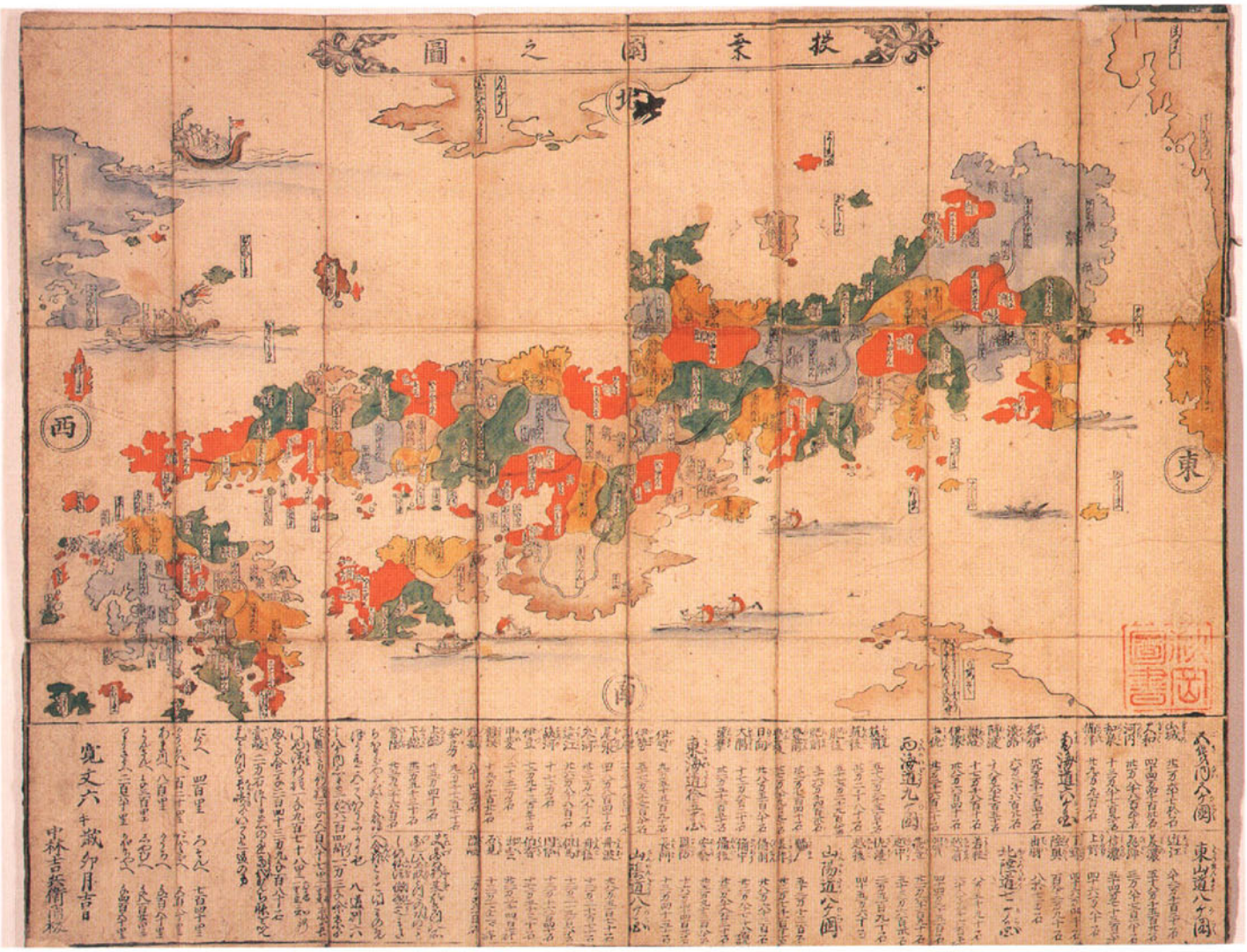
一方、世界の北の果てとして想定されていた雁道も、東の果ての北方化によって、極北の地位を脅かされることになる。つまり、世界の東の果てが北の果てにもなることで、雁道は単独の極北ではなくなってしまうのだ。

しかも、実体をもたない架空の土地である雁道は、本州東部が北上すれば、その圧力に屈しかねない状況にあった。事実、あたかもプレートにのって漂移したインドのように、西へ押しやられて大陸の半島となってしまうのである。たとえば、元禄15（1702）年頃の『大日本国之図』（❼）や宝永6（1709）年の世界図『南瞻部洲万国掌菓之図』をみると、大陸から不自然に突き出た「韓唐」半島のあることに気づく。この韓唐が雁道――かりのみち、がんどうなどの読み方がある――の漢字表記をかえたものであることはいうまでもあるまい。

しかし、地理的知識が拡充するなかで、地図が科学性の名のもとに実在の世界のみを描き出すようになると、東に留め置かれた蝦夷や韓唐半島は消失へと向かわざるをえない。こうして、日本列島はメタモルフォーゼにともなって、その外皮を脱ぎ捨てていくのである。それは、幼虫が身を捩らせて脱皮するようすに似ている。

さて、こうした異域や異界の変形と変位に加えて、日本列島周辺の地理像に、もう1つの変化が現れる。それは、本州東部と北海道の北上によって、日本列島の北端が大陸に近接するようになったことだ。しかも、これによって、日本列島と大陸とのあいだに、1つの閉じられた海域が出現することになったのである。つまり、花綵列島の「誕生」と日本海の「成立」だ。

こうした地理像を比較的早くに描き



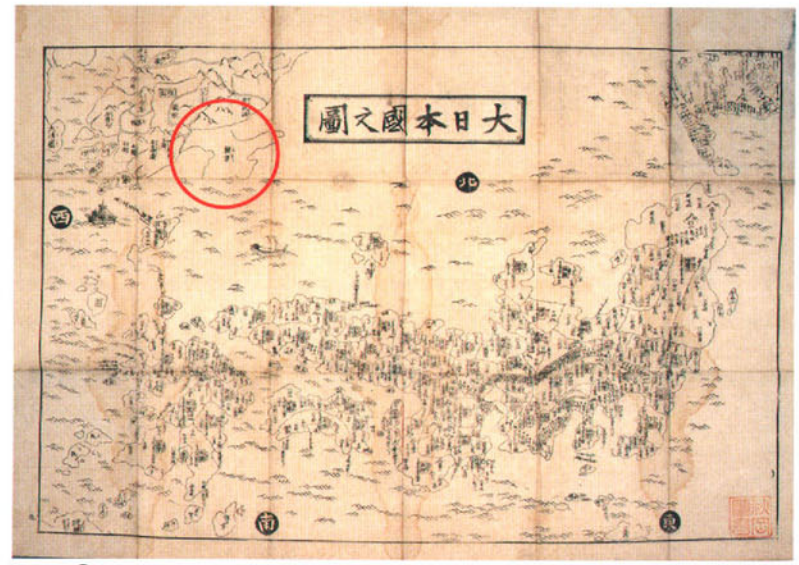
❻ 寛文6年刊扶桑国之図（国立歴史民俗博物館蔵）

出すのは、1602年にイエズス会の宣教師マテオ・リッチが北京でつくった世界図『坤輿万国全図』(❽)である。これをみると、地名の錯誤はあるものの、本州の先端とその先にある島——この図では「北陸道」などの地名が記載されている——が大陸に接近し、日本列島と大陸のあいだに閉じられた海域が姿を現していることがわかる。

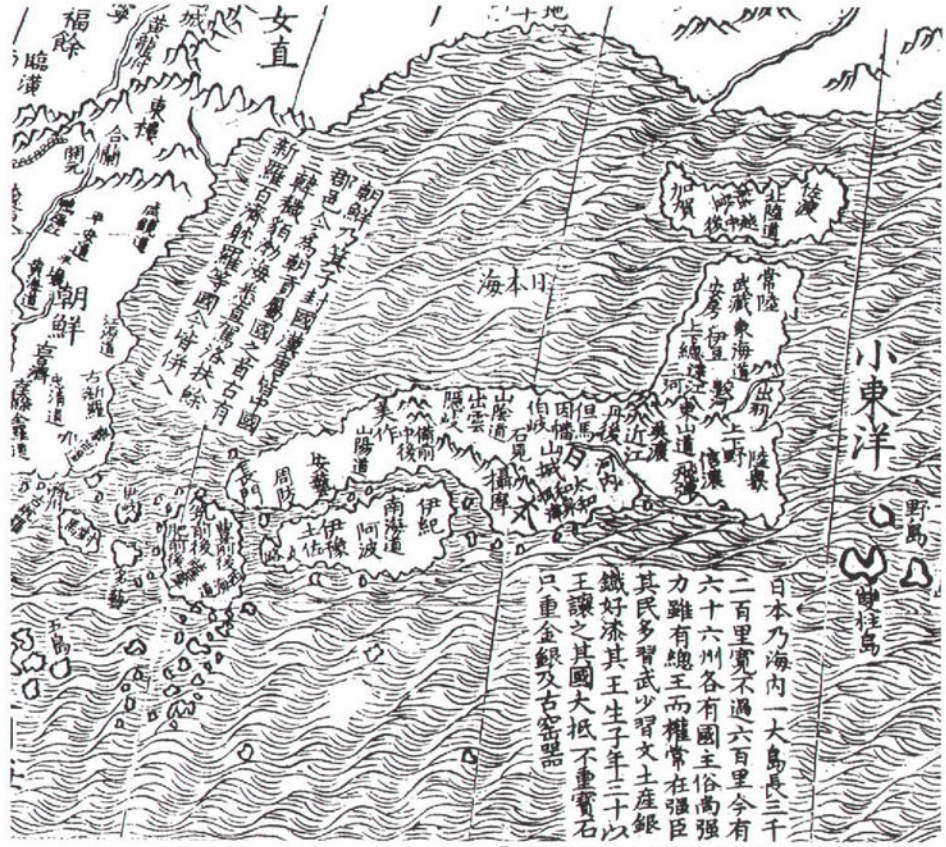
ところで、この閉じられた海域が、大陸の東方に茫々と広がる大洋から区切られて、独立した海域として識別されるようになると、独自の呼称を獲得するチャンスが訪れることになる。事実、現存資料によるかぎり、この海域に独自の限定的な呼称を最初に記載する地図は、これを閉じられた海域として早くから描いていた『坤輿万国全図』なのだ。つまり、対象が認識されていたからこそ、それに呼称を与えることもできたのである。日本列島のメタモルフォーゼによって、この海域の呼称が成立するための条件が醸成されたということができるだろう。

さて、地図のなかの日本列島は、以上のように形態変化——メタモルフォーゼ——してきた。しかし、これを地図の進歩とのみみてはならない。地図のもつ機能は、空間の形態を正確に描写することだけではないからだ。むしろ、地図は、より本質的には、空間のイメージを表象している。とすれば、このメタモルフォーゼは、空間の質的な転換、いわばコスモロジーの転換をともなうものであったとみなければならない。だからこそ、その転換においては、新旧のコスモロジーの鬩ぎ合いをみることができるのである。

(編集担当　白石厚郎)



❼ 大日本国之図(国立歴史民俗博物館蔵)　○がこみは"架空の土地"韓唐(雁道)



❽ 坤輿万国全図(日本周辺部分)(宮城県図書館蔵)
本州の先端にあるべき陸奥・出羽が記載される位置も興味深い。

[文献]
・青山宏夫「雁道考—その日本図における意義を中心にして—」『人文地理』44-5(1992)
青山宏夫「日本海という呼称の成立と展開—地図史からのアプローチ—」『環日本海地域比較史研究』2(1993)
・海野一隆『地図に見る日本—倭国・ジパング・大日本—』大修館書店(1999)
・織田武雄『地図の歴史—日本篇—』講談社(1974)
・川村博忠『国絵図』吉川弘文館(1990)
・室賀信夫『古地図抄—日本の地図の歩み—』東海大学出版会(1983)

青山宏夫(あおやま・ひろお)
「地図の中の人間になりきって、あれこれ想像をめぐらすのは、子供の頃からの癖です」。京都大学文学部卒。同大学大学院で地理学を専攻後、新潟大学人文学部等を経て現在まで、メインテーマとして、日本人の地理的知識の形成と変遷を文献や古地図から考察してきた。総研大の共同研究の研究代表者として、現在、「前近代日本における景観の形成と変容に関する総合的研究」に取り組んでいる。